特別
14
3157
1

真所 松月庵 正徹 門弟
伊勢物語 一冊

中一

初宿

京かたの人はいとうつくしう
将
ものしたまへるを
まさいあり女はう
兄弟紀有常廿二人
たちこのいまはくらかたをも
あかしてあかしてあかしてのち
ものいはせたまへるこのき
のちはなりきあはれすとてを
ものうの男のすの

ひきあけたまへる
かたちのいとさきまさりて
はらはらとこぼれかゝれる
髪のいとをかしけなる
いとをかしうなん
見たまへる
見たまへる
かたちもいとをかしけ
とのたまへるに
遅早
いらへもせで人々
嫁
ひとりごちやうなる

十二

しかたこのりくてかれ京をも
こまこの京ハ人家まさはさまま
ちりくの時にきの京より女の二条后
きの女世人ハまきりくりきれ人
ちりちりハつすしきりくしの
のんくのうちすりまりとかの
まのはくこうちゆくこうくこ
いくるくんのはは食しのはいのち
のちはのはのちりくの 添雨

十三

しりくこのりくの 聰相
女の二条后りしりきりくこ
りくて
りのもの宿神言ん
しりきりのは神とはく
二條の后はまきの人
のりくくくりの人

ごきの事のり
ゆ出除よりたはきさい
宮かつまりの　西　きつ　對　ゆ
人のりりれを　顯意　中　いのく
つまこ　こ　ま　ゆ　ゆ
と　親月　正月　十日の人行こ　ゆ
りかれよりれ　りあり雨ふけと人
月かよへき　而　もりれい
名　ゆ　こ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

八年九月ふけりり
ゆそとうしくいとき　天ゆて
月ゆ　と　ゆ　ゆ　ゆ
かうそのつりりさよ月れる
ふくまくふりりくゆそと思ふて
よりれ

月やのねまや山れ岩のね
ほのかりまりれ　ゆりく
さしみくよれ　ゆくとゆ

ありけり

十五 むかしおとこ有けりひむかしの五条わ
たりにいとしのびていきけりみそか[蜜]なる
所なれば門よりもえいらで童
べのふみあけたるついひぢのくづれ
よりかよひけり人しげくもあらね
どたびかさなりければあるじきゝつけ
てそのかよひぢによごとに人を
すへてまもらせければいけどもえあはで

かへりけりさてよめる
人しれぬわがかよひぢの関守は
よひよひごとにうちもねななむ
とよめりければいといたう心やみけり
あるじゆるしてけり二条の后にしの
びてまゐりけるを世のきこえありければ
せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ

十六 昔男ありけり女[二条后]のえうま[不得]じかりけるを
としをへてよばひわたりけるを

うしてわかんいてはたらきこそ
めるを河とはいふなのそいきれは
ふるへいとさまりうばけものとれ
はなんとも毎男ましいろゆきを
よたばくかとうたひよれはゆ
有しもこうくいかへこそいうう
ありのかいはいゆしうれはのう
なるうしは女とのはたとそれて
はうこゆやかうひとゆひくうう

非枯津國其所口傳

しかりやかのひと異なのう
ろにゆしうやはひとうしてうう
のかやとひれとれ神まさりれしん
きっけりうやうくかのけりり
ケれはのてりのかのもの
しくのけうひなり
ゆるのうなとの人のひとき
ゑとふうへくきふまりものと
れは二條の后ハこれ女房の中

つかうまつるやうにてゐ給へりけるを
かたちのいとめてたくおはしけれは
ぬすみておひていてたりけるを御
せうとほりかはのおとゝ（照宣公）たらうくに
つねの大納言また下らう（下臈）にて内へ
まゐりたまふにいみしうなく人あるを
きゝつけてとゝめてとりかへしてけり
それをかくおにとはいふ也けり
またいとわかうて后のたゝ（直）におはし
けるときとや

七
むかしおとこありけり京にありわひ
てあつま（東山ノ云ヤ）にいきけるに伊勢おはり（口傳）の
あはひのうみつらをゆくになみのいと
しろくたつを見て
いとゝしくすきゆくかたのこひしきに
うらやましくもかへるなみかな
となんよめりける

八
むかしおとこありけり京やすまう

毎年ゆきてすまんとも
むさぼりすまんとすれば人ひとりふたり
しらくりかりこのかためさ海の
あけくれとみくもりとみく
ものかなめさ海のけしきもつくろう
笠こそ人まもやはさうねと
むかしたちかりさうさんとも
うつくしきものよ異国
のけまれうまとすれば
しへきうとうり

有常

有常

人流

利負

そのかりうとうとす友とすう人ひ
ちうちうくいきうちうちうこれば
人なるそまきひいきうちうこれ
ちやけりとうこれ
うこれひうはれ
れいうとやけ
ケ毎やけうとい
りうのまのう
ちうちうれさう

遍昭

二条后

武蔵寺長良中納言

下総守遠純左中将

関白殿

司直口傳

さるはれのくもりあるひはいかに
ものゝ事はゝ人ゝ
ゝ人ゝとやうもまれ人
ゝ都ゝ
ゝ人ゝやゝゝゝ取れ
ゝ若ゝゝ
ゝ日ゝ
ゝ人ゝ
ゝ人ゝ
ゝ拳ゝ
ゝ者ゝ
ゝ有常西ゝ
ゝ武蔵守ゝ

ゝ有常ゝ女
ゝ當ゝ
ゝ直ゝ
ゝ中宮大夫良門カ
ゝ藤原ゝ
ゝ器量ゝ
ゝ一向ゝ

君のかくしそしれとなくの波
しこうはうつ
はつかしきれなくなる人をわ
ものしりといはるるまうん
此もし人を国にそれうれま
毎年年まりなれ
しつ男のはまゆさるにさうら
さりつらもとうせるは　鳥羽忠基ヤ
はかりの雲井よりわれ

二十二

さしもしれそうのまて
わすれくしさ　春日野ヤ
わすれ人のりれい国の人をうれ　長長之
まりう女とはくさしれ中よりて
ふりまりう人　満来
わすれ人のりて大つひしそ女
まくし
しまのいかやそそはの草の

二十二

しつはかりのうる人を　二条后
わすれくしさ　春日野ヤ
わすれ人のりれい国の人をうれ　長長之
まりう女とはくさしれ中よりて
ふりまりう人　満来
わすれ人のりて大つひしそ女
まくし
しまのいかやそそはの草の

中将有常モトミカタ名付ノ事

昔武蔵国にすみける男ありけり

京にいとなまめいたる女ありけり

二条后

京なる人を

かくにこしかやはくいこと　菜蜆
ちりとへてうたむとすれ
寄田へ　田舎
のうれしやひとりなれ女
孤
食
鶏
夫
無何条事

さうかきえいとうはんていうとくきんい

十六 昔きのうつ○とこ二人のうらうえ

のうえにけうしまうくゆゆしのひ

淳和仁明文徳 くれとのうい世こうゆゆしうよれ

よれつ孫の人まんこもわうと人うと

當 ていくしのてうのはこのえん

くこに人もすまいく食て

れ昔まうゆゆしかう世のつ孫

のこもとき年このひまこあり

良門女 かやうくさこのあれくはわゆまり

かりての孫のきまうくうあり

大原 所へ行とはこ面こしひう年

もかうのれいまは行とのれ

北興のれまはかれはもか

うのまゆひうしく福ひんのひ

中将 かうしのはこうれゆうく

いまはとまうはなこもいゆう

ゆえもえきくはうとこうさ

理

有常

桜花

八重もかすむ雪とうぐひす
きすいのうちとはなとみやま
十八 しゝまつのかぜ 女 のうちゆきこうう
のうちの女うしろしの人のうれしかへ
人世とて美のむかしのうへれとや
まくる男れりへやか
紅うかいこゆきの
枝もゆうちもみ
たゝゝとそうもみ人ゝ人ゝ

十九 くれ年うちの一つ人の美は
わかい人ゝ神ゝ人世
しゝたゝゝ人やけへゝ女のゝ
うこゝうの人とのうちゆう
ゝうのなくゝれうたの一雨雪
小女のゝは人ゆゝ
ゝもゝ思ゝす女
のゝ雪のゝもゝ人のうゝゆゝ
ゝすゝうゝは人ゆゝれゝう

さとうりんれいはゆきこうて
のゝ雪はなにのとしをかこと
はなつのやまはなはるやよんのう
はるはうりんはいまさたこうの人とのん
いひけは

伊九 昔男奈良 ありけるに女有常 ありけるに
のひとりはてゝくゆきこうて
こうすゝ人へのりけれはこうは人ら 八橋ヨリ九
やしいもうりこそのりへ若葉也 ちのこと

ゆきとゆりくゆきこうて女ありけるこうら
いひけり

ふかくさの山のもとにすみけるを
かくこそ世のうきもしらめ
そやりのゆりけれはこうまい京ふ
きつゝくもりてきさらけは
いはつまこうの交はきおもん
さえつゝこうこいの岩かうるこ
しりゆくこ女小町とこうこうて

ことのかたちもいのちのつのり
ぐるしいとうあれどしれて世中とうと
思くいていもしと思くるる分庵
ようくのりかまつまる
むてれハうるしたもやきし
世のわりさまの人いとあ孫し
さしんとうてむくいりうしあかく
おきとれいうはうとくとうとまれて
たはしわとうくいりてうしとれ

いとうかきていはるもとうひとし
むくさんうんうんれとはことうら
ようたはしうりれいうりうく
やしうひまさせのうりうと風
のうしあくいやまし
ひしくかうとうら
人へいとやもやまん むうう
やしけしのうとうえゆ
こんあいとひさしくのうくあしまして

わかり給いひとせあり
いかりて手すさび草の中ごとに
人をいかりませすりか
うの命
ますます草うとましきものと
ひとりとはいまもしかまし
みかりにひとりて男
わすれんとやひとり
かりにゆもかり来

中宮さらの雪ふかく
ふれさせたまへるに
とはひとりとはいとかの世成ふれの
ことなりこそ
ひとりとはしてうの中ばや
ますますいかり給へ
たかうの人とは
かりうえんはかりき

七二

深夜内侍

此ものがたりを聞て男
のいはくこれはうつくしき
われをうらみくるしめる恩
しいひなまこと
ひとつのものとなりて
れいよりまことに
いよ〳〵孫とやのくはれん
燈のよはの代
とりとよるふかきも

こゝ来りてうらやましがるん
いとゝあつかりしかくまで通
昔のかつまこしけるに
井のもとにてあひしかはかを
成よりれいはこゝも女有常女
のうなをと男いこの女とをえそ
恩女いこの男とを恩けるやのあも
すれりもきてるんのりそれはく
こゝのうちのゆこゝをうちくん

調五口傳

有常ニツミテケルソ云

本意

群司佐伯忠雄女

盗人心

なましや君のひだるに申さん
にしき人の飯もりてゐけるかと
やうやうくらへもいとも成ようありまし
くのみ飯の色もましまして今はうちとけ
こそのまくてもいやしかりしはぢらひけ
く手づからいのいひかけこのうつは（實ニ飯ヲモルニアラス配分ヲ下知シテ云）
にもりけりかの（イセ）女見てつうりて
いつも成ようありまてれいの女色ら
とれの飯の人やりて

君のあたり見つゝをらんいこまやま
雲なかくしそ雨はあれとも
といひて見いだすにかうじて食まて
人こむといへりよろこびてまちけるに
すきぬれは
君こむといひしよことにすきぬれは
寺のまたねもみこいはじものねたる

昔男女（イセ）のくにゝ（津ノ国）ゐあはしける人なりけれは（有常女）
こゝろかはしと男なかす成にけり（離別ノ心）

みやつかへしにとて別れをしみてゆき
にけるまゝに三とせこざりければまち
わびたりけるに心ねむごろにいひ
ける人にこよひあはんとちぎりたりけ
るにこの男きたりけりこの戸あけ
たまへとたゝきけれどあけでうたを
なんよみていだしたりける
あらたまのとしの三とせを待わびて
たゞこよひこそにゐまくらすれ

といひいだしたりければ
あづさゆみまゆみつき弓年をへて
わがせしがごとうるはしみせよ
といひていなんとしければ女
あづさ弓ひけどひかねどむかしより
心は君によりにしものを
といひけれど男かへりにけり女いとかな
しくてしりにたちておひゆけどえ
おひつかでし水のある所にふしにけり

小指血又ハ長ノ心心

さこのりのれいたこ
付のれ

離別心

のの元興寺の法師人とこ
はるかいまそ
きしそねる

實三五九 痛貞トカケリ

さつきくうふ成こ
しゆこのりのこいたり

小町

りの女ますのりの
れの聖にこ
のこそのれ

廿五

ゆこのこなり女や
見ぬふるさとの孫や
おれそのりれ
ゆくをの

廿六

れたこ丑源こ
こりの女と

二条后

こ成こりの事
こりこ
こりの人の

廿七

れこ神こ
りの舟の
れたこ女

同前

一大いこそ

いと成てゆれば女房梅の花をとらせ給へる
とりてとて
なりけり
所つゝ西の中の人ゝ
とゝ中へ水の下にも有りけり
北しとかたこそ
なるらん沼や見ゆんと
水の下りとりとおく
昔ゝこのゝたりけり女房
小町
なりけ

なりてかの
水のそこに成
しとしよりの
二条后宮
春宮の女御
二条后宮
ゝ
ゝのつけられ
花のあるねのけ
ゝ
ゝ中こそ
の事の
ゝ
二条后

廿一

し一宮へうちくわつこゝまうれば（伊勢ニ）
ゆかの前とまらはかりに河はのくさ（雛）
四月の末ゆゑ菜はたんのうん所
人ゝとまりぬ

廿二

けふ人ゝとうげへいまする（ノボルト）
とうへまうまれ生まれ
此夜ゆかの（深雪信）
しまの月
いまへ三ヶ（イセ）
月ゆり年ゝ有て
いりのとまきうつて

廿三

此夜とまりまするかり
何も思ふやうに
なん

しまたこゝは岡山ふ
かひ名ゝ女ゝこの（有常女）
しに出ふ
ゆ金ゝ
若ゝうゝ
ゆ

（禁僧）

世ノ
ひとり行き中に
毎日をくれば
中人
云事をいふやう
ひとり中こつれかうの人のりり
四条伝
イヒエストビ
人をえらいとて
うちのしるけくしるる
世八
八千クテトニ忘ビ
四条伝ハ中将メイビ
だりふるてこつはる
しりつのうてあるこうの人のりり
むかりわるとて合緒
ちりてとまる

世六
あるそのなるめんとも中に
四条伝
世七
首をれわかうりとひこうり
女
首をそうの人者むろ
あんと人りしりつのくよ
しりたこ文このりりの女
小河
わつりりわつりくやりむ
ぬのてトひるめきうの人
出つけまねもしんあるも

うつ
うつりにけりとしらぬまに
あひ見まてはいさしらすそかし
むかしきの有常かりいきたるにありき
てをそくきけるによみてやりける
君により思ひならひぬ世の中の
人はこれをや恋といふらん
返し
ならはねは世の人ことになにをかも

崇といふはしとしまいらすて
むかしさい院の御門と申すみかと
おはしましけりそのみかとのみこたかいこと申
いまそかりけりそのみこ
うせ給ひておほむはふりの夜その宮のとなり
なりける男御はふり見むとて女
くるまにあひのりていてたりけり（有常女ト同車之）
いとひさしうゐていてたてまつらす
うちなきてやみぬへかりけるあひた

あるれ下の及これく源へいとりと工
人ありて地見ゆこの車と女ども
ゆ見くくらこそさくかまくわいさ
りかへいとかありとりく女の車
に入ありくくゆくこのりゆ人この
なられさりす火しや見ゆんごりら
なんすくそのれの男れに義
秘
出くれいうこりまへこりくら
秘
年へあられけくこと上とこけ

かへくらや
秘
れあへれなくさ
きゆゆゆも源はしすふ
あられしたへ色このこれこうれ
直
有くくいくらいさ
れいいの
（今カヘ流ル子ノ別ジミ本意ノ奇ニハアラストゾ）
中
しくしまくきゆこ
思くくゆくらすゆ
けくそこへ女と
（有常ハサヤノ定文ニアワレト先幼スルヤ）

（絶入ニ死ス）

（又アカトヨムベシ）

（貞観十一年七月十八日絶入一日一夜中将貴遠ノ記中有炎魔宮十七ノ記アリトミエタリ）

（春日三ヲテニ初）

（イモラトハ伊与介小野行長妻）

（有常女）

たりけりいやしき男もたる志はす
のつこもりにうへのきぬをあらひて
てつからはりけりこゝろさしはいたしけれと
さるいやしきわさもならはさりけれはうへの
きぬのかたをはりやりてけりせんかた
もなくてたゝなきになきけりこれを
かのあてなる男きゝていと心くるし
かりけれはいときよらなるろうさうの
うへのきぬを見いてゝやるとて

紫のいろこき時はめもはるに
野なる草木そわかれさりける

むさしのゝ心なるへし

四十二

昔男いろこのみとしる〳〵女をあひいへり
けりされとにくゝはたあらさりけりしは〳〵
いきけれとなをいとうしろめたくさりとて
いかてはたえあるましかりけりなをはたえ
あらさりける中なりけれは二日
三日はかりさはる事ありてえいかて

アノ子ハ中将　肩　紫ハ女ノ異名之　又同前リト云心之　小町

桓武才七皇子三品中務ノ賀陽親王

ものうらうらしくてのどかなるに
雨かすかにふりてはるのくれ
ものとはいまはるのくれ
ものうらうらしくてのどかなるに
ことのほかにうつくしき
うちつけの人こそ伊勢とたはぶれてこと
ばかりいとあはれなる人のまうさ
ばかりとこそはいひけれ。源ノ
くにあきらの中将ワレハカリトシモ(ハ)
人ミてひとくにまうすれば
とまうさせ

汝カ

郭公のなくこゑにあやまたれ
ぬるまもわれはあるかな

武カシコトアラハレヌト思テ ケシキソトル

ものうらうらしくてのどかなるに
若のうへにあたらしきこと
いとりのまうとうまれわれは
ハ

郭ノ人名

ものうらうらしくてのどかなるに
雨はさはにふりてはるのくれ
ものとはいまはるのくれ
ものうらうらしくてのどかなるに
ことのほかにうつくしき
うちつけの人こそ伊勢とたはぶれてこと
ばかりとこそはいひけれ。源ノ
くにあきらの中将ワレハカリトシモ(ハ)
人ミてひとくにまうすれば
とまうさせ

遠方トカケリ

有者甲斐介任テ下ニ

有業女

賞

ワサハイナノナルベシ

祝心ヤ

中人

西三条左大臣実良相女深夏内侍ノアタ

葵

籠スルベシ

天喜三年

第六

しらかはふとうちきなめりける

有常

行ひてもとめしに人の国へ

甲斐(下)

いきけるをいとわびしくて別れ月

日をくるせもあるにあらんとおもふに

思ひやりていとかなしう月日のへにけり

第七

しらかはにいとあはれなる思ひして

なん行世の中にあらんは人をつれは

目別

されはへきゆゑもあらしとおもふれ

はなくやあり

なりひらの中将

ひとりもあらしとおもふ

しらかはにいとあはれなる思ひする女

二条后

あるにあらんとこの男とあるにあらと

はなくはなきまさりけり

大奬

宣文伊豆（下ノ）

中将イモウト初草（廿子）

廉（十字ノオカミトヨミリ）

史記　形廉（カタチノカミ　カヨキモノ）　良美者

本条有別紙

小町

思ふ人とゆきあひて
世ゝのうれハ
初春ハ清ら
あれこの世とのこりへき
又たゝこ
暴風ようけ
ものゝ人ハ
又女ゆ
ゆきハようと
本読有別紙
ゆきとゆ人と中成り
又中こ
紅水とはひとちをも
いけまして
ものゝ人へ
ゆきーゆ
ゆ
五十一
ゆたこ人の
ゆ
創
遍照家
一説二条后ノ歌
アキナラサラン季ニハサカシトゝ云リ

五十三

ひゝ中こゝに有りける人

二条后より流し給ひ

ちまきとゝうせ給ひ

にける事を

やうやう君はわ

すれ給ひにける

所は野にいとゝ

しくきゝとゝまんやり給ひ

五十四

昔中こゝの宮ゝさ女御にしてゝ

ゆ給ひ給ひ所に

いとゝしらん人を相

五十五

昔男ありけり

四条后

ひゝ中こゝに宮ゝ女ゝ

ゆ給ひ給ひ

り給ひ給ひ

ゆ給ひ給ひ

五十六

昔男ありけり

二条后

ひゝ中こゝに宮ゝ女ゝ

ゆ給ひ給ひ

り給ひ給ひ

ゆ給ひ給ひ

五十七

昔男ありけり

二条后

ひゝ中こゝに宮ゝ女ゝ

ゆ給ひ給ひ

り給ひ給ひ

ゆ給ひ給ひ

五十八

昔男ありけり

二条后思し

ひゝ中こゝに宮ゝ女ゝ

ゆ給ひ給ひ

り給ひ給ひ

ゆ給ひ給ひ

二条后

ボツクレテトモ

植武才十姫宮生子内親王コトモナキハヨキヤウニ

好コトシナキトモ

女田ツカルニアラス

田舎ナレハ心

愁

廿二 文選云至菴ニ見老サ ホトリニツイテ名ルシニシ

顕義ニ

ものいとかなしきことかぎりなし

六十九

東山

ひとしかりしかとこゝにいとゝ思ふこゝろ

ひとしかりしかとこゝにいとゝ思ふこゝろ

先ノ流罪ノ所ニ

しらしらしきまゝに入くる

方とてまへしき宿りとそん

秘ミ 口傳

かくてぬいくやうに入ぬれは

やすらかにてきむく

秘ミ 口傳

さはらぬ

ひのいれしけく

六十一

男有りて宮仕へ

中将ハ町ト夫婦ナリニカ實離別

ニテ大江雅章ヲ走ニスルニ

奥へとて人の國へ

貞観七年三月廿九日ニ依勅使ニトニ

ある国のしぞうの官人の妻にてなむ
有ときゝて女あるじにかはらけ
とらせよさらずはのまじといひけれ
ばかはらけとりていだしたりけるに
さかななりけるたちばなをとりて
さ月まつ花たちばなのかをかげば
むかしの人の袖のかぞする
といひけるにぞ思ひいでゝあまになりて
山に入てぞありける

使蒸(?)　酌トルシ云や(?)　本文有別紙

六十一

むかし男つくしまでいきたりけるに
これはいろこのむといふすきものと
すだれのうちなる人のいひけるをきゝて
そめ河をわたらむ人のいかでかは
いろになるてふことのなからん
女かへし
名にしおはゞあだにぞあるべきたはれじま
浪のぬれぎぬきるといふなり

筑前国アリ　定文カイモラト(?)　小町

六十二

むかし年ごろおとづれざりける女

惟章死ス 滋成才六

皇子基隆 住吉ニソワスルニソカヘテアルヽ

中将カ（下ニ）

ありやのつきもしらずしらかほなる人の事ハ
ひとりて人の国のうらに人りけるに
りて人のまへにむかへゐたるを
しりてよりこの人のうちけの人ハ
北のまにひるれハとこせもりて
たゝこの所をいとやすくて
いとへのひいけるをも
こゝろもとりとりかも
さとおもふくしとおもふ
きくのうらにをきたるをとへハ
波のうらにたちをいるなと
北之
あれやこの所のつとの
年月をかさねたる人
北のひくまにこそ
まとけるをとこ
しらをいけらわんと
其後不舍ト云ヤ

六十三

名扇ヤ

ひとり世の所のうらに女いとをはんん

中将ヲ思ヽ

中こと宣えてふと思へとも出
し給ふかさし海こ[illegible]
とを三人と（一男大将源顕景　二男大納言源雅路　三男惟喬親王）皆文德皇子
の子ハかうけかるとうへくやんねうて
こ成給ふるとこ[illegible]
とめてすりこの女ハきいとら
と人ハとまけのいそこの上也
中将よめもせてふと思ひ
りのきくいきあひく道

（石馬頭ナリ九故ニ其口ヲヲシキクニ）
ときくしらとてかりくまん
思とをれハめれしりくきて
初りくらけてなはやこ又くりう
れい女やこの（恒尚見）へいきてのまん
くくハ男かのくまん
本文有別紙
せこもあれけくこ
とれとあつ中新こ又中
そくくあくきと人くくしくく（文集云恥知出賢人ニ前痛加人前棘ニ中）
あらこくくきてらくく

かの女のせしやうに忍てたてり
て見れハ女なけきてねとて
狭席に衣かたしきこよひや
こひしき人にあはてのみねん
とよみけるをとこあはれと思てその
よハねにけり世中の例として思
ふをハ思ひ思はぬをハ思はぬものをこの
人ハ思ふをも思ハぬをもけちめみせぬ
心なんありける

第六十四 二条后

むかし男女みそかにかたらふわさも
せさりけれハいつくなりけむ
あやしさによめる
吹風にわか身をなさは玉すたれ
ひまもとめつゝいるへきものを
かへし
とりとめぬ風にはありとも玉すたれ
たかゆるさはかひまもとむへき

六十五 二条后

むかしおほやけおほしてつかうたまふ
女の色ゆるされたるありけりおほみやす

（栄子）

中将四ノ君（ニイル）

殿守助佐善雄

（カタハライタキ）

姫君ノ道ノ長ヒ（ニ）

又長良ノモトヘ行

しなてこの男いとさんまうかりのや
の物へと佛ゝ見ゝ
ゆ見れといやまき
見人のこたはしかれまるかく
うのこかりの道いたはんやし
かきしく色を
てもしいきりの
しさこかしまらくめりしてを
色うのこたはしかれを

賀茂ノ指

至女

恋をとゝ見ゆ
河ゝ人

東山ニ隠居ス

たはかりけうくれいこの女れいとく
ゆ見やを不女とはまてこ只
こうてゆりあまし一クれいうしを
ゆくなく

深夏伯

實ニ非蔵ハ只カクス義ノ云

ワビ流フ

めしつれりし世をいう人
秋とをかうの世
化をまとれしは男ハ人間ハ
しうもとつて
とはいをうそ

駿河守高經カ祈ヨリクルシ云

神はうけすもなりにけるかな
といひてなんいにけり
この御門はかほかたちよくおはしまして
清和天皇
佛の御名を御心に入て御声はいと
たふとくて申給ふを聞て女はいたう
なきけりかゝる君につかうまつらて
宿世
つたなくかなしきことこの男に
ほたされてとてなんなきけるかゝる
ほとに御門きこしめしつけてこの男

かゝれはこの女はくらにこもりなからそれ
にそあなるとはきけと逢見るへきにもあらて
なむ有ける
さりともと思ふらんこそかなしけれ
あるにもあらぬ身をしらすして
と思ひをり男は女しあはねはかく
しありきつゝ人の国にありきてかく
うたふ
いたつらにゆきてはきぬるものゆへに

見まくほしいまゝにあれば
水のみ清きなかれに
たはれをんなの
いさゝかなる作せの出湯の作り
ひとつ中こゝろの国にこゝろ
ありめしたるなり
中将兄民部卿伸子中納言行平弟母波守寺平友達三大内記敏行左兵衛佐行方ホ
方よりまゐらせたる
もれぬるなれば
雑波はとゝまる
ふれやこの世とう
人くるまゝに

ひとつ中こゝろ
道遥
ふれとめつれば
世にうとき
友こ
世にくいたる人の国へまゐさる
よりまゐらせたる
ハくりこゝろ
ちらくしこゝろ
まつまとうもの
引人の中よりまゐる
昨日雪
中将
カケロウ
イトケト
又五音相通

花の林をうしと成けり

六十八

むかし男いつみの国へいきけり住吉
のこほりすみよしの里すみよしの浜
をゆくにいとおもしろけれはおりゐつゝ
ゆくある人すみよしの濱とよめといふ
かりなきて菊の花さく秋はあれと
春のうみへにすみよしのはま
とよめりけれはみな人々よますなりに
けり

六十九

九さ斎宮殊有子細習可有口傳

むかし男有けりその男いせの国に
かりの使にいきけるにかのいせの斎
宮成ける人の親つねの使よりは
この人よくいたはれといひやりけれは
おやのことなりけれはいとねむころに
いたはりけりあしたにはかりに
いたしたてゝやりゆふさりはかへりつゝ
そこにこさせけりかくてねむころに
いたつきけり二日といふ夜男われて
あはんといふ女も

狩

見観十七年五月二日

京ヲ出ル二ヶ月五日

染殿后

労 イタワル

ワリナクト云

有別紙

将

（器量ヨキ人）

（一時ノ五更ニ分其初ニキタルベシ）

（桓子ノ三ヘ毋宮ノ方ヘ童心）

（廿ノ三更ニテ了ル）

（實事疑ヘトミタリ但皇神慮如此）

たちこいれいとうあるてよりの
かきくもとつれなかりしかと
夏うりくとはあしたのうち
北しんくくかりくいそのの野
のりきつはうてこしもの人
しりていれくのんと思ひ
國へうこいけさへ宮のこけもり
代使のりとゆくこけのこ
しられはもくのひまえきて

一説ひと 呼戸 世人 樣人 流ニ 商 口傳

仕カ又 侍勢ヲ 絶蔭

めをはたりれ國へもう身をこ流
まはゆこ百人れとち波とか
せとえのすの代やりのけ身せ
すはりりの女くしとこ長の
ゆこ言ゆくくいこのりて
ケまはから人まくれとあえりれ
北つくくまこの明けれ
けはまれ中人して言ケまを

樊田 ふん

ケイ ツ 五音相通

アヤ 縁 ミテ ユモ アワヌ

おきけく
又のよさきはいとけん
そのうれはかうの國へあしとうら
斎宮は水ぬれたかう 時に 文徳天皇の
女御のはらの人このいとけ
ゆかしかりかてう
きくうしの海ちに色とそ
いけるこの人やへりとかう
ケうそはるやいけとそうとく

神りとへよのうれけり西
ゆこいせの斎宮と四れ内侍
まくまつれる人は宮と
とかりの女うさ事まく
撰遺ニハ人丸トニ云
世とやう神のいたとこの色
大人やへ人ちえまくりふ
はとこ
逆事
廿八仕ニ云 桓子ノ詩
もくいさとうちや京
神のいさかうケうまに
深義有可閑口傳

七十二

しらゆきこいせ（竹物語ノキリテ載ル）國成の女（新宮）と申
そ（尾張）なりけれ國へいくとていとう
恨のれハ女
なほまれなれハ清らかなるかに
うちとくのうらなる浪ふか
思ふ

七十三

しらすこいハ（二条后内裏三ニ上ニ文）とりとよけとせそこ（消息）
とまりつるへきなれ女なりとも
思ふ
目ハけ

七十四

うつれすこさ君ましまさ君ましまさ
岩ものもとうさ山はへそ
のもとの日たくしひとるふ

七十五

しらたこいハ國にあくいこて（新宮（當國ニアラシト申））
ゆんとしのなこハ女
たほまれ濱
つはのよ（ヤ三又ト云）ねる（五音相通）
此しくまて

世

いそ海にかすかに松くハ
しらひとの見ん

又中こ
波にそまぬ世ハ人
けさうの袖ハしをくる
世りの一こと

七十六

し一二條の后ハ春宮のたちん
ゐとゝ名河氏（大原（ニイリ江））神（見観三年三月三日）
りこの后ハ
人ハ
ちゐ
だ
神代
（カノ山共ニアル三モコヒシク思奉ル）

七十七

文德

良相女

貞觀二年十二月十二日

道師 夏雇僧正

奉物

道

と右大將よりいまそかりけれとも
所ゆゑとはいまはしらくもの
とりあつめたる人々とりあつめ
たくさんの人々をいとなみ
つくりたる山の
山の人々のまへ
とまとまりたる

經九

今ノ樂ノ人

佛事道師 山階禪師心

右大將 藤原

安祥寺

山ふかの宮に御中ゐ

文德〜清和 春宮沙汰 三条左大臣 紀名庸家 三三年 アリ

三条

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちさのりあきかへしよりあ
河門ニ上ノ方ノ
長冬あれはかりもとへけるハ
あれハ四さ月ニ成ぬ又ハ河内人中将ハ
こゝもんノ方
わすれ中納言ハ行平の心そなりしも
人のうらうらを
雨さへ降ぬ人ハ
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

酒のみしのひぐ
こゝのよりやまと
さこゝのりのかゝ
きみしまひのうて人
まもそそくろ
おやうにいたっきこゝのとうさ
けりすの毎ハ
此ひしまりの今ハ國
りの食しくゆきあ

佳祚

ハるタチノハルニモニ
水ケハカクイリ

こゝのりの日の清
よ六十よ國の中
印ハ人の命ゆ
温ふしいたっきこゝ年ところ
しりあれ世ったれ
まりの山さきあかし人れ花
三所り文のりの
の花風よいすれ
りこ河右しの成り人と

八十二

手城天皇ノ孫ナリトモ代ヘタリテ

皇孫ナリ其方イヤシトイヘリ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

見こしうらもてまいりくさ有て
そもつく岸もあまりて成のん
山のあなくいはの原のかた
しのはまかたをこれ海はれ
見こしたりまそうふ
しのはのゆかりまつりの日
ちつく文よりはるはそら
しくいもしたはかさ沼
ちくはのしてはきりこの

うまれの見つかりく
枕草子
はくさ草刈はまそもち
はかの氏
さとも見なは何ハ色しのはにこり成
見こたはのこりそわり流てなる
かりはまつてはつりは無
何りはは流てなる月
まゆ見あてまりんと野まて
あはしの山氏うを見ハ雪いと

貞観十四年五月八日 四七歳 法名素覺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たいわまこはねはいかなるものといへは
いとくはんまくわき者かは
かくこそうらめしかりけれ
世の中にねはなをしなくらんか
世をいとはしのれ人もこの山のあり
しかはゆきこそ有りけれ
まいりはの者はいかなるものとはいかに
山ふかくはいりてやきの
宮はいつくまこはこそ

さとりのれいはんこうとうきあつしれり
沼とはすなわちくるしみ沼なり
尖
しかるにおとこ男もまた女とあり
有常女
まことにかくのごとくやあらんはけんえて
ひさしくかくしてもろもろの年をへて女人
りょうしゅうをもってくるしみやむることなん
果
たとえばかくのごとくやあらんか
いまこれをもってこれ人世をもってこれ
たとえばこの海のごとくなるのみ

六

尖
もしかくのごとくあらばなにをもってか女人をいとわ
宮殿をもってこれ身をもってこれ
しかるにこれ国しかるにあるいは
風の里にいたるもていきそしたん
もしかくのごとくあらば
あるいは風はあるいはやさしく海をもって
はこぶもしくはけわしくもしくは
さとりをもってこれ人のすがたをもって
身をもって風をもってこれ
さとりのいたるところ

清舟介

行平左衛門督

天台左衛門督瀧ヨリモ名ヒ

四座

小袖子

栗

行平

中将

待之間 ニツカアヒタ

貫

乱

中将

中納言三吉義秀子

藻

若っかあるとはかりまちくらし
世かの人のうちそいはあまりけりやあるや
八 しらいとはさくらはあるかあるなきあ
まつとはあるはまちくらしく月とくくれっ
かりしいとら 中将 中将
たはくとはあるとはそこの
けりしたる人はたいとあるよ
九 しらいとはあるはやまはあるはまきは
あるる人と思はけく年へるは
二条后
十 しらいはまきあるる人とはそこあるるとら
梁友后
かれはあるはやは思ふんはあるとあるよ
ふるとはくあるるるあるるるあるる
しくとはくるるるるるはあるるる
かはあるるるるるはあるるる
くるるるるるるるるるるる
わかるあるるるるるるるるるる

九十二

昔月日の行とさへかけてやこの三月

中将　貞観四年

ゆきまに色青かりし梅花の
ゆくすえもかうらんかな

二条后

九十三

しらたまかとみるまでに
さこそはえきてこそ
あり金ふく
ゆきのはしれるかな

棚無小舟　斉夜

九十四

人と思ひけるをとこ
金きこゆや有ふね
こそこそ思ひたりしを
あつまくにいきけり
あるくにはてに
ありこそやしまきはのりて

アナウノ〈トイリ字ノ色黒ノ如ク

ナソモカクトニ同事

ハヒヒトナキトトニ

九十五

昔色ゆうの事は世
しらたまかとこそ有ケれ
男ときまする成けり

深草内侍

後ニ定文カ書トス

小将滋春

はれとこの御中成かれいこまりこそ
あるかとおぼしめしたるこそ
かつ〻ふかく人成給ふ道にはうとやれり
なほいまだ中こ
定文
うつのとうせうらかの中こ
中将
ゆくへのさこゆの事とはいまそ
さまの〇はうとやへと秋人とは
うへ人はへきゆ
漏
かうしてしくやれりなほ

身のうれ
秋人は音ますなれや
立
あるこうやちへまうこ
まんようれ女
ちのはのまにむつこや
ちれ
平へ
二條の后
有常女
有りし女
つくよひこ

さいさんくだりて、風吹き出でぬ。積
ふねもとまりぬべきに、
この山のあなたに、
ひとりの女、
ものいとかなしげに、
なきてゆく。
いかなる人ぞ、
と問へば、
「いまはわれは、
この山のそなたに、
しばしばゆき通ふ。二条后
女とぞ、
聞きしかど、
ふねもとまりぬべければ、
かくなん。

身の次第
重ね有習
十五

やまのかなたに
すむとかは
人のいとはむ
雪のしたに
ねをのみなきて
春をまつ
人しりてこそ
ものは思へ

可尤

かくて、
ふねもとまりぬべきに、
ものいとかなしげに、
なきてゆく。
いかなる人ぞ、
と問へば、
「中将
のもとに
いとまを
乞はばや
とて、
口吉
ゆくなり。

れいこの女はせうとにあり
きゝあり中ハこの女のうちに
とりてもてあそぶ
くとなもあり
れいこの女はかつらのゆきと
こうしてかくれ
さうさたきそ人とせハ
これをもとくいねさて
けのりまさそのうち
めくらやの女をいつ不ハそれ
中将ノ許ヨリ
海人
逆手
中ハ海人のゆきそとうくんのる
とはるしてはさと人のうまハ
ヲトキ
中西やのんかねのやの女
いまこそハ人をいとあ
九十七
しつかのはいまうさうと
ハいまうかたらは十九貫の除の家
ゆきそ花ちるまつかいくの

こと以上ありけれども
しるしたまはせやいとうきうとうこと
ゆかつてうちはてうまうまつりやこかか
用ようしたれはけうはしきと
はてうてあてまつりてて
はの寺のしき者のぬすしゆもは
はつ（キミリ積入名心）はれはまのもものうはか
ことくあてまつりはれは
つうとうしはうはくれはうく

はつうう
しつ右近の馬場ひとうの日しつ（月下）
ひとあてあうはは車に女（梁殿内侍）のか
きさまれはかつえはは中ね
成うれやきこかうはう
人やわやもうえきあ人のきう
わ益（無益）ふくうかうきん
ゆ
えれしねやつうやのうとえいん

中宮の人々
成給
（夫婦ト云心）
のらハ無しとぞ
十四
男殿源殿
（加山徴殿トモ）
なれハ
やんごとなき人
（二条后）
ものハ
草や草を
くゝりて
草也
是
こゝ也
（中将兄）
三
兄君清貞
客人
器量
藤原
（良門カ子）
中宮
藤の花
ナカサ
三尺寸

[illegible]
[illegible]（早下ノ丹ノ）
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]（忠仁公）
[illegible]
[illegible]（栄花）
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]（三二）
[illegible]
[illegible]（侍従三条宮上侍従宅ニ於テ）
[illegible]
[illegible]（憂）
[illegible]
[illegible]（大原ナル所ニ）
[illegible]（子息）
[illegible]（生ケル口傳）
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ものゝ心ゆかしく
五三
ひとゝせ中ごろ
まことに
寶
思
ものゝあはれ
仁明天皇
ふかくしる
人
のやまとやまとの
光孝天皇小町ノ文ヲミヌケルリ中将
ひとゝ
思ケル
ものゝあはれ
知
人
なりけり
弥わが心ばせとこゝろ
やしるらむ
ものの思ふらむ

ものゝあはれ
知
五四
人
ものゝあはれ
知
人
なりけり
ものゝあはれ
知
人
なりけり
ものゝあはれ
知
人
なりけり

[illegible]れいゑ[illegible]
[illegible]ん　二条后

五六
心ゝ中こゝろ[illegible]ハ[illegible]ねつゝとゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　二条后
白[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ん[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
さ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

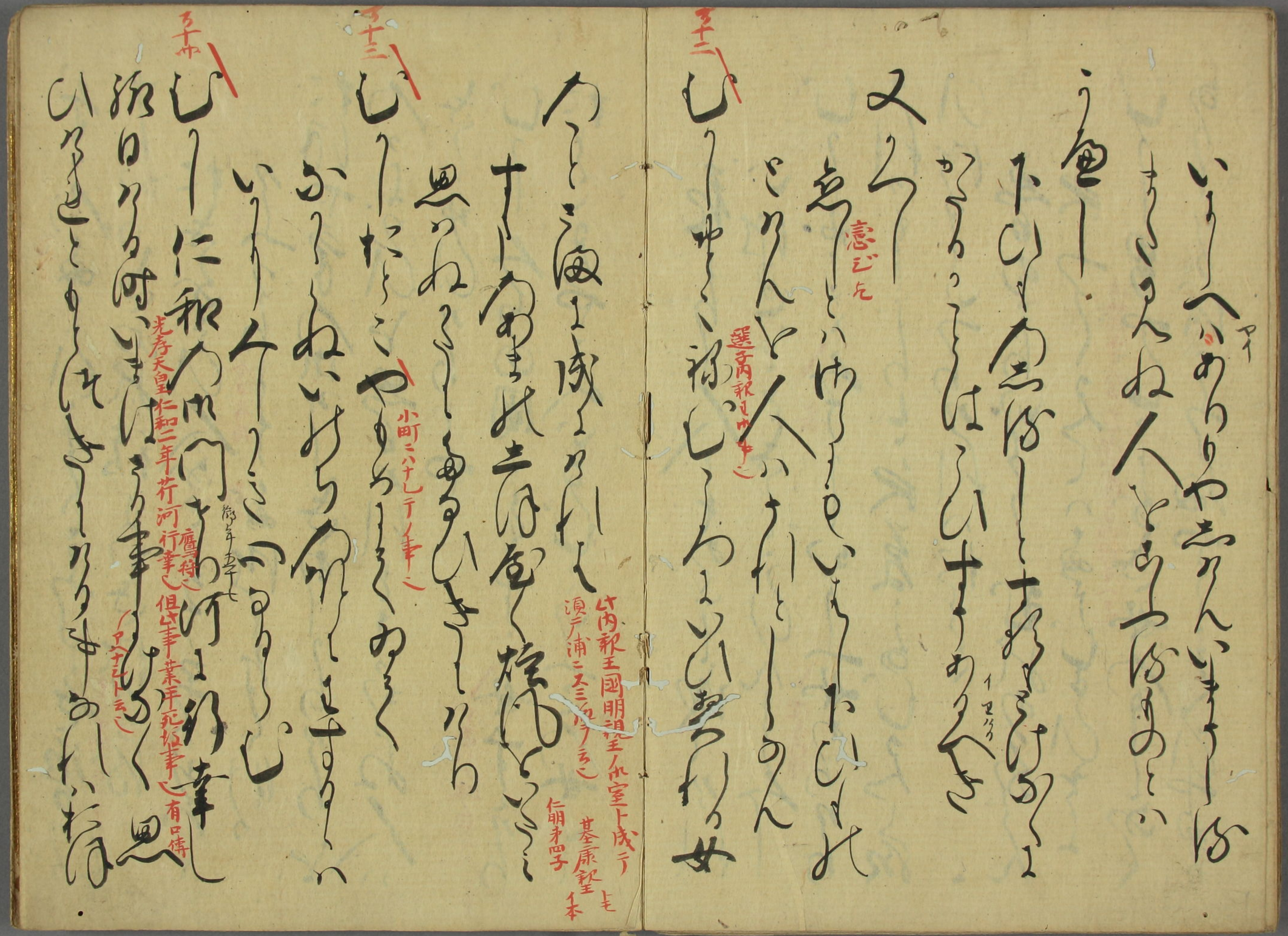
しのぶ人のんとうそてせくやう
りそきしたちまち男ようは
ぬきくかうてまうけんさ河
神のしらくのしらくあり
うをし神いかゆ世ようりく
のうえう神いつうちなんさ川
まうへのれまきくあんん
とうりれゆきいうそそ
いまそまうくつくあうと
毎ゆうなりたくうえんかうせあり
えそはの事成りら雨のうりあえ
きうのえうまりはは結えとあり
いこへ毎いうしうりはいの
ゆこありうくくやとと
かそくにゆはしはうえん
まうと毎いふうりまれう
とくくゆりれえのうもう
のへてこうまはうてまはうり

行幸　中将

女ひとのうへとうたへく
風ふけはさゝなみ浪こそたちまれや
はるかたてつくしのうみ
はるかにはるかにこそ
ゆくすゑのゆくすゑ
ゆくすゑのゆくすゑ

有常乃妻直世シテ人事

男ゆくすゑ
水ゆくすゑ
ゆくすゑ
ゆくすゑ



いとへはあるやうにいまさはまさんねんとあつまるとい
うをしるしとなりしかはるとしはいとまなくけるとも
かるるつとはいとまなくけるとも
又
志ごと
志ゝとはいつもいとひされ
どもんと人はたしのん
選角報ヒカキ
ひとゝゆきへ初ひとゝ
ひとゝ
ひとゝ海と成ゝ
すゝめまれ
思ひねるとゝ
ひとゝ
小町ニハナヒテノ事
ひとゝたゝこゝやもゝ
かゝねいとゝ
いとゝ人ゝ
ひとゝ
ひとゝ仁和
光孝天皇仁和二年芹河行幸
ひとゝ
ひとゝ

内報王國明遺墨ノ中室ト成テ
源戸浦ニスミ
墓康望上モ
仁朝才四子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五七

文德天皇　天安元年正月十八日三十アリ

五八

二条后哥

五九

深殿門侍

六〇

四条后ノ若ノシヲヒ三世ニ事ヘ　夫婦ノ道ニヒラヌヒ

六一

凡一限又限家深秘　仁書深底　能ニ可尋有ヒ

人のみるかぎりは
なりつくと
とはるかにまもりまもりてこそ
はるばるとまもりまもりてこそ
中将カモトヨリカヘ(ニイラスル)
心有別紙

天一

山ちかき梅の花
カモノ
源致

人のまもりはるかに
うちとけむとおもふ
ねるかの人とこそ
きくへけれ
致

天二

山ちかき梅の花
火

思ひとつけ
りくへけれ
イセ

山ちかき梅の花
ねてこそ
ねるかの人
ひとしおうつせるかな

天三

山ちかき梅の花
二条后

女とは
ちりの深草
ちりぬるかの人

年とくちかくなりぬれば
いとゝ一の草野とや成なん
女房
二条后
聖かしこくなりまさるとも
なほ君いかゝ思ん
北よりなりたちにたる少しも中納言
四位なりたりし
五十
心ばせいとおもしろき事とゆゑ
なりまされ

世事有深意
中将
中将五十六三月元慶四年五月廿八日死トテ二条后ニ奉ル
中将
心ばせいとゆゑ
なりまされ
年ごろ
昨日

写之事

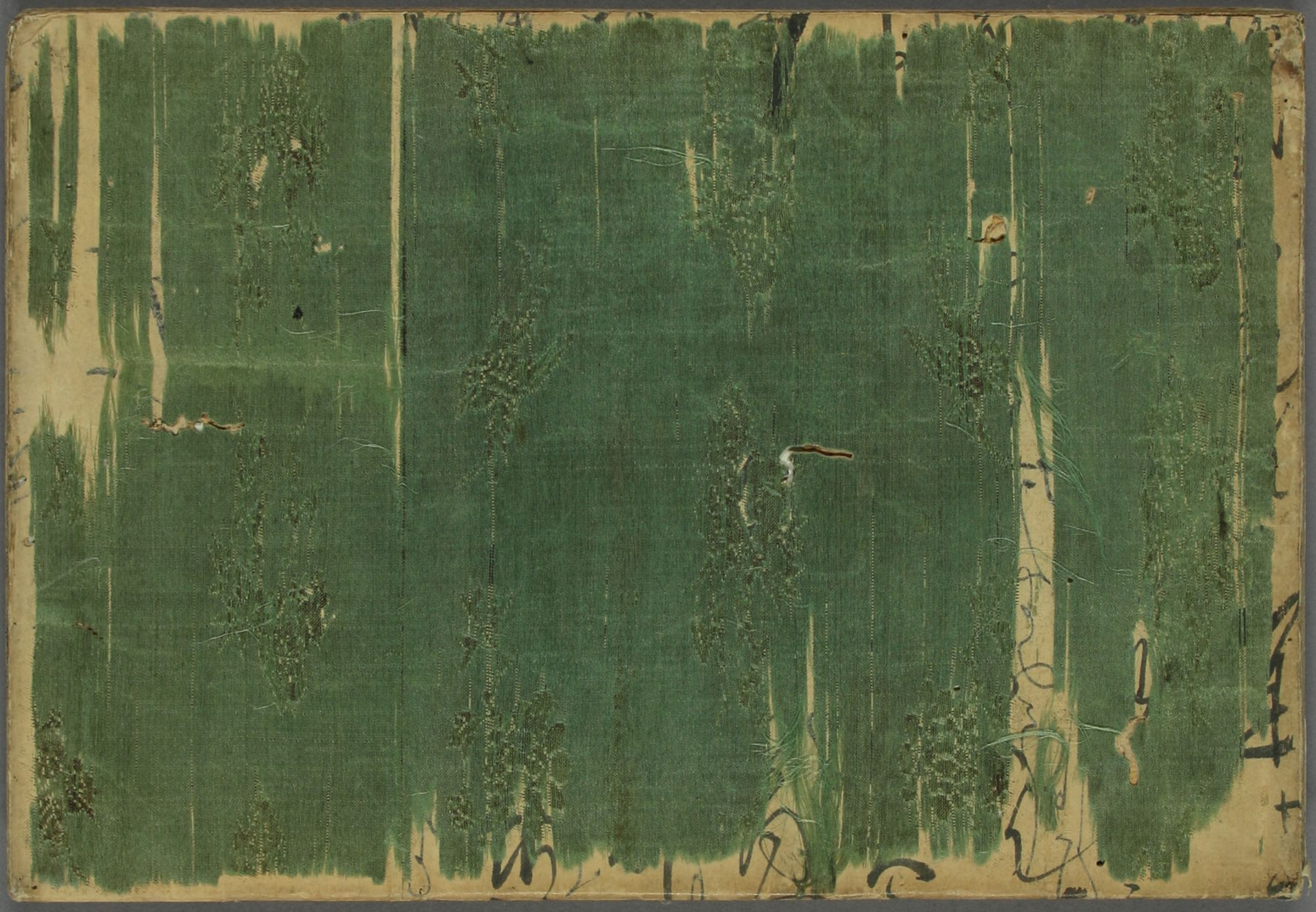
合多事而用捨也可備證也
近代以將使事為端之事也
来未代〻人〻業也更不可用〻
此物語古人〻流不同感稼也
中將自書或稼 伊勢業作也
彼氏有書落事ホ古〻人注
不可尋其作者只可歌詞華言葉
已

筆之写則

戸部尚書

此写本定家卿自筆也冷泉為秀
卿相傳之彼家所付本則以彼
本写墨處先年於草庵燒失之
念之間重以同本洗東六郎常添
出写校合之如為彼洗定家之奥
書判形本筆者写墨之也於之可
為洗本也

筆者写判

正徹

此一冊後源孔範鄭
以右奥書證本不顧老
眼不堪深筆笑可恥
外見者也
文明十五年三月日志所及